若き美人女医の仕事

作＝かねたたき

先週の月曜から勃たなくなった。１０日ほど様子を見ていたが、意を決して、病院に行くことにした。

通勤途中に電車の窓から見える病院に行ってみることにした。最近できた、大きな病院だ。待合室には人が大勢いた。かなりはやっている病院のようだ。

俺の番になり診察室に入って驚いた。先生は女性だった。それも若い。２０代半ばに見える。しかもそそられるような美人だ。

「どうされましたか？」

「え、あの……」

俺は口ごもった。

「症状を話していただけないと、なにも解決できませんよ」

俺は意を決して症状を話した。先生は興味深げに聞いている。

「何か原因に心当たりはありますか？」

「いや……その……」

「まあいいでしょう。それでは実際に症状を確かめましょう。ズボンと下着を脱いでください」

「……え？」

俺はうろたえた。しかし先生は平然としている。
「聞こえませんでしたか？　症状を確かめますので、ズボンと下着を脱いでください」
「で、でも……」
先生が男性なら、女性でも年配ならためらわなかったかもしれない。でも、若い魅力的な女医である。羞恥心が先にたってしまう。
「実際にどういう状況なのかわからなければ、治療のしようがありませんよ」
そう言われて俺は渋々ズボンとトランクスを脱いだ。先生は俺の下半身に顔を近づけて、じっくり観察している。
先生は白いブラウスの上から白衣を羽織っていた。ブラウスの胸元は大きく開いていた。前かがみになっているので、立派な谷間がはっきりと見える。先生が姿勢を変えたとき、俺は驚いた。ノーブラだ！　きれいな乳首まではっきりと見えた。それが目に入ったとき、俺は１０日ぶりに下半身に充実感を感じた。
「なんだ、ちゃんと勃起するじゃないですか」
上目遣いに先生は言った。
「いや、勃ったのは本当に久しぶりです」
どぎまぎしながら俺は答えた。先生は、俺が勃起した理由がわかっているのだろうか。
「それじゃあ、今度は射精に異常がないか確かめてみましょう」

そう言うと先生は、俺のペニスに手を添えた。
「え、ちょ、ちょっと……」
うろたえる俺を気にせず、先生はゆっくりとしごき始める。
「さっき原因を聞いたときに口ごもっていたけど、本当は心当たりがあるんでしょう？」
手を止めずに先生が尋ねる。
「え、あ、あの、実は、睾丸を……」
「そんな気取った言い方はしなくていいわ」
「は、はい、き、金玉を……」
「金玉をどうしたの？」
「……金玉をぶつけてしまって、その……」
「そう、それは大変だったわね。痛かったでしょう？　金玉は男の人の急所だものね」
そう言いながら先生は、左手でペニスをしごきながら、右手で睾丸を撫でまわし始めた。
「でも優しくされると気持ちいいらしいのよね」
ペニスと睾丸の両方から這い上がってくる快感、俺の目を釘付けにしているたわわな乳房、そしてときおり見える乳首。もう気が変になりそうだ。
「せ、先生！」
俺の右手は先生の胸に伸びていた。次の瞬間、俺の下半身を支配していた快感が激痛に変わっ

た。先生の右手は俺の睾丸を握りしめていた。
「変なことはしないで！　検査中ですよ」
先生の左手は相変わらず俺のペニスをしごいている。しかしその快感よりも激痛の方が上だった。
「せ、せんせい、おねがいです、てをはなして……」
涙ながらに俺は懇願した。
「そうそう、変な気はおこさない事ね」
先生の右手は再び睾丸を撫でまわし始めた。
「さっき金玉をぶつけたって言っていたけど、本当はぶつけたんじゃないんじゃないの？」
「……えっ……？」
「あなたはすぐに変な気をおこすようだから、今みたいに女性に仕返しされたんじゃないの？」
俺に快感を与え続けながら、先生は尋ねた。
「……」
「正直に言った方がいいと思うけど」
そう言うと先生は再び俺の睾丸を握りしめた。
「☆※▼＊◎！」
俺は言葉にならない叫び声をあげた。苦しくて息もできない。

「さあ、しゃべる気になった？」
「い、言います言います！　手を離して！」
俺は絶叫し、ようやく俺の睾丸は解放された。
「先週の月曜の帰り道、とても魅力的な女性が私の前を歩いていたんです。その女性が何かを落として前屈みになって拾おうとした姿を見たときに、つい手を出してしまったら……」
「手を出したら、どうなったの？」
先生は相変わらず、俺のペニスと睾丸を愛撫し続けている。
「その女性はこちらを振り向くと、いきなり私の股間にひざ蹴りをしたんです」
「そうだったの。それじゃあ言えないわけよね。で、金玉を蹴られて、あなたは？」
「その場にうずくまりました。しばらく気を失っていたかもしれません」
「そりゃ、金玉を蹴られたらそうなるわよね。で、その女性はどうしたの？」
「わかりません。気がついたときには、もういませんでした」
「そう。で、あなたはそのとき、女性が前屈みになった姿に興奮したのね？」
「はい。白いピチピチのズボンをはいていて、前屈みになったときに、お尻にはっきりと下着のラインが写って、それを見たときに……うっ！」
ペニスから白濁液が飛び出した。先生は表情一つかえずに、左手で受話器を取った。右手はまだ俺の睾丸を愛撫している。

「あ、南さん、すぐそちらにいるナースを全員集めて、私の所に来てちょうだい」
その言葉に俺は驚いた。
「先生、一体どういう……？」
「射精にも異常はなかったわ。まあ、あなたにとって、これが最後の射精になったわけだけれどもね」
「えっ！」
「今、ナース達を呼んだわ。あなたのような女性の敵は、みんなの手でやっつけないとね」
「ちょ、ちょっと……」
俺は立ち上がろうとした。しかしそれより早く、先生は俺の睾丸を握り、椅子の方に引きずりおろした。
「あなたが私の胸をじっと見ていたのに、私が気づいていないとでも思ったの？　本当にいやらしいんだから。もうじきナース達が来るから、おとなしくしなさい」
俺は先生を突き飛ばそうとした。しかしその寸前、先生は睾丸を握る右手に力を込めた。俺は激痛に身をよじった。
「馬鹿ね。玉を握られて勝てるとでも思っているの？　男は玉を握られたら、言いなりになるしかないのよ」
そのときナースが入ってきた。６人いる。その中の一人と目があった途端、

「あ！」
俺とそのナースは同時に声を上げた。
「正田さん、どうしたの？」
先生がそのナースに尋ねる。
「この人、先週ぐらいに、帰り道で私を襲おうとしたんです」
「そう、あなたが被害者だったの。いや、加害者と言った方がいいかしら」
先生が言った。正田というナース以外の５人はぽかんとしている。
「そうですね、その人、すぐに私の金蹴りの餌食になりましたから」
その言葉に、他の５人のナースも、くすくすと笑った。
「あなたにチャンスをあげるわ」
俺の方に向き直って、先生は言った。
「診察室から無事に脱出できたら、あなたを見逃してあげる。脱出できなかったら、どうなるかわかっているわね？　あ、そうそう、先に言っておくけど、診察室は完全防音だからね」
先生は俺の睾丸から手を離した。俺は立ち上がり、まわりを見回した。ドアは２カ所ある。正田というナースと先生には近づかない方が無難だ。片方のドアの近くには先生が立っている。もう片方のドア、さっきナース達が入ってきた方のドアの所には６人のナースがいるが、ドアのすぐ近くにいるのは、わりと小柄な子だ。

俺はその小柄なナースに突進した。体当たりしようと思ったが、俺が近づくとそのナースは、手で俺の目のあたりを引っ掻くように払った。視界が一瞬奪われる。次の瞬間、俺を木っ端微塵にするような激痛が股間を襲った。その小柄なナースは、動きの止まった俺の睾丸を思いきり蹴り上げたのだ。俺は股間を押さえて転げ回った。胃液がこみ上げてくる。

「力が弱いからって、女の子をなめてかからないことね。男の急所が金玉だってことぐらい、女の子は誰だって知ってるんだから」

小柄なナースは俺を見下ろしていった。

「残念だったわね。ここのナースはね、みんな私から護身術を教わっているのよ。どうしても帰宅が遅くなることもあるからね」

苦痛にうめく俺の上から、先生が言葉をかける。

「それじゃあ、この人、どうしたらいい？　先週は正田さんを襲い、今日は私を襲おうとしたんだけど」

「えー、先生を襲おうとしたんですか？」

「命知らずなやつ」

「先生、こんなやつ、金玉ぶっ潰してやりましょうよ」

「そうよ、こんな女性の敵には、男にとって最大の苦痛を与えるべきだわ」

「さんせーい！　二度と女を襲えないようにしてやる」

ナースたちは口々に叫んだ。

「あらあら、みんな私と同じ意見のようね。それじゃあ、始めましょうか」

先生は俺を抱き起こした。

「さあ、誰からでもいいわ。でも一発で蹴り潰さないでね。私も含めて7人いるんだから、全員必ず一発は蹴ることができるようにしてちょうだい」

それから地獄の責め苦が始まった。7人の女性が入れ替わり立ち替わり俺の睾丸を蹴っていくのだ。俺は何度も気を失った。いつ果てるともわからない苦痛が俺を襲う。

「他の患者さんもいることだし、そろそろとどめを刺しましょう」

先生はそう言って、俺を仰向けに倒した。腫れ上がった睾丸が床に当たり、ひんやりとした感覚がした。7人の女性たちは次々にその睾丸に飛び乗った。